

CLを通して見る現実面白い

(年取るということ日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子 amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2010/09/05

日曜日、6時を少し回った早朝、駅とは逆の方向に帰宅中と思える30代ほどの二人連れ。男性は自転車に乗っていて、女性の徒歩に合わせてこいでいる。何か口論している様子で、男性「～なのかつ？」女性「だったら言うんじゃないよ」。喧嘩をしていますが男性は自転車で先に行ってしまうことなく、二人は並んで帰っていく。連れ添った夫婦ってときにだれもこんなもの。

2010/09/06

よりもよって、七～九月をとおして気象庁始まって以来の異常気象の猛暑が続いている最中に右腕の故障。腕があがらず、毎日、ときどき結構激しい痛みを伴う。医師の診断は、精神科と同様、～恐怖症とか、神経症、ノイローゼなどのように、目に見えない人の中身の異常にメディカルラベルのひとつ、「五十肩」とか。要は筋肉疲労だそうだが、患者はどこがどうなって、異常が発生するのか知りたいのに。実際にはどうも医者にもわからない症状に適当に診断名をつけるようで、あだ名みたいなものか…と歩きながら考えていたら、突然頭上で「オーシンツクツクツー」と現実に戻すセミの大声をいただいた。

2010/10/05

ウォーキングの帰りは京成電車を利用している。最後部の車掌室に隣接した二人掛けの席にスーツを着た髪を短く刈り上げた20代の男性。学生のようにストライプのネクタイを緩めて。前に投げ出した右足に白黒まだらのソックスをはいて、黒い靴を脱ぎかけて足先に引っ掛けている。左足は立て膝をしてシートに載せ、夢中で本を読んでいる。乗客が乗り降りする車内の変化にも本からは一瞬たりとも目がそれない。もちろん車内放送もまったく耳に入っていない様子。目的地はどこへやら。この若者がこんなに夢中になる（見てる）本（漫画？）とは？タイトルは「三国志」。開かれている頁は4分の3ほどで後半の部分、戦いの場面にちがいない。それで納得。まさにCLの「悟りの階段」6段階にいる状態で自分が消えて本の中に入り込んでいるのだ。

2010/10/07

一年生と見える男の子が二人、小学校の帰り道を歩いている。一人がもう一人に「気持ちをもつのがだいじだよ」。こんな小さい子がなに一般の大人びたことを話しかけているのだろうと耳をそばだてると、交差点に差し掛かり、二人はべつべつの方向へ。話しかけた男の子は、別れ際「4位、5位じゃなくて、一位の気持ちをねっ」相手は頷くでもなくだまったまま。「気持ちをコントロールできっこないけど、できなくちゃいけない、わからない」と言っているようだ。交差点を渡らず右に曲がって急ぎ足で帰っていく。その背に「気持ちを消さないでねー」と念を押しながら一人は交差点を渡る。サッカーか野球クラブに入っているチームメイトなのだろうか。テレビかコーチの言葉の影響に違いないが、教育の場である学校は未だに間違っただけ事実を子どもたちに伝えている。

2010/10/14

ピョコピョコと動き回っている年長さんほどの元気な男の子と70歳近いおじいさんが寺院の広い敷

地内をお散歩中。聖教殿の階段に孫を立ててカメラに収めて、孫の後を追っていく。荒行堂と本殿を結ぶ渡り廊下の中に二階家のような門があり、その下が聖教殿への通路階段になっている。その階段をピョンピョン降りていこうとする孫を呼びとめ、「ほら、あそこの屋根の下を見てご覧、なにがあるー？」と尋ねる。「なにも見えない」「大きな太鼓があるのが見えないかー」二段もどってきて背伸びをして首を伸ばして門の中を見て「見えたよー」「あったろう。ただスタスタ歩いてくだけじゃ、せっかくお散歩してるんだからよく周りを見ないと」とおじいさんは優しく孫を窘めている。事実を観察するCLの教えは、こんな頃からこうやって受け継がれ自然に身につくにちがいない。

2010/10/31

ある家の木製格子戸の門。左右の下半分に鳥小屋のような金網が張ってある。動物（猫）の進入を防ぐためらしい。金網上の門の右側には「葛西ふれあい会」の表札がかかっている。ふれあいは人間に限るらしい。

2010/11/01

年取ると車の運転はできても危険でしない方がいい。その代わり車が必要なときは「ゲイシャ（迎車）」がお出迎えー呼ばれたタクシーのフロントガラスの右側に赤いライトの表示が乙だこと。

2010/11/18

だいぶ日が短くなってきた落日前、日が照って青空も見えるが、黒雲が湧いている。大粒の雨がとどきポツポツと落ちてくる。真間川の橋から遠くを見渡すと北方の地平線から太い虹が登っている。他の場所は家々が連なり、そこからしか虹は見えない。向こうから下校してきた3、4年生の男の子が鼻歌まじりにやってくる。「虹が見えるよ」と声を掛けると、すぐに虹をとらえて「スゲェ!」。「橋になっていないけど、太い虹だよね」と云うと、笑顔で「ウン」と頷いて、その後「どうもありがとうございました」と私のほうに笑顔で挨拶した。ほんの一瞬のできごとだったが、虹と男の子の笑顔の「ありがとう」の美しい二つのプレゼントは、奇跡のよう。

2010/12/14

主語・目的語がない会話

- ・夫、冷蔵庫を開けながら、「出てないだろ？」私「…？」夫「これ」と蜂蜜レモン汁のビンを手に取り出す。
- ・夫が固い枯葦を紙用ハサミで伐ろうとするので、「ちょっと待って、持ってくるから」（花バサミを）

2011/02/14

主人はよく風邪をひく。冬場は一月に一回。症状は鼻水と咳で日常生活の活動にまったく支障なく、ジョギング、飲酒、風呂も欠かさない。ところが、移されないよう神経質になって手洗いや殺菌を小まめにしている私より、本人はどこ吹く風邪（風）で、うがい、手洗いはしたりしなかったり、鼻かんだ手で食器を触り、咳きやくしゃみをするとき手（本当は袖）で口を覆わず、菌の蒔き放題。マスクをするのは私。結局は風邪が移って寝込むほどではないが、症状は重く、治るまで長引くことになる。

クリーニング店の奥さんが正月早々風邪を引いて長引き、元気になって久しぶりで御用聞きにきてくれた。「すっかり治って良かったわね。今まで風邪はひかなかったんでしょ？」「10年ぶりです」「じゃー鬼の霍乱ね」「いいえ、主人からうつされたんです。主人は軽くて、私はひどくて長引いて恨み浸透ー」「もー恨み骨髓です」と大きく言い切って戻って行った。夫への恨みの表現があまりにも小気味良く、爆笑したおかげで、気づかなかった似た体験の恨みのつかえがポロッととれた。今日はバレンタインデー。（千葉県市川市CLインストラクター）